

かなでほんちゆうしんぐら

## 仮名手本忠臣蔵

### 〔解説〕

寛延元年（一七四八）八月、竹本座初演。竹田出雲・三好松洛（しょうらく）・並木千柳（なみきせんりゅう）の合作。八月十四日から十一月まで打ち続ける程、当初から人気でした。赤穂浪士の仇討ちを脚色したもので、同じ題材を扱った数多くの先行作品の集大成であり、「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」と共に三大浄瑠璃の一つに数えられています。

当時の幕府の検閲を逃れるため、時代を足利時代に、場所を鎌倉に置き換え、登場人物も、浅野内匠頭を塩治（えんや）判官、吉良上野介を高師直（もろのう）、大石内蔵助を大星由良之助（ゆらのすけ）など、に変えています。

### 〔あらすじ〕

殿中での刃傷騒ぎに、お軽との逢瀬を楽しんでいた勘平は慌て裏門を叩き、喧嘩の様子を尋ねます。主・塩治判官は閉門を仰せつけられ、囚人同様の網乗物で帰ったとの返事に、勘平は、主人の大事に居合わせなかったことを恥じ、切腹しようとしませんが、お軽に止められます。そこへ出てきた高師直の家来・鷺坂伴内を追い払い、お軽の故郷、山崎へと落ちてゆくのでした。

# 裏門の段

立騒ぐ

表御門裏御門、両方打つたる館の騒動提灯ひらめく

大騒ぎ。早野勘平うろく眼まなこ走り帰つて裏御門、

砕けよ破れよと打叩き大音声だいおんじよ

「塩谷判官の御内早野勘平、主人の安否心もとなし。

こゝ開けてたべ早く〜」

と、呼ばはつたり。門内よりも声高々

「御用あらば表へ廻れ、こゝは裏門」

「なるほど裏門合点。表御門は家中の大勢早馬にて

寄り付かれず、喧嘩の様子は何と〜」

「ホ、ウ喧嘩の次第相済んだ。出頭の師直様へ慮外

致せし科によつて、塩谷判官は閉門仰せ付けられ、

網乗物あみのりものにてたつた今帰られし」

と、聞くより

「ハア南無三宝、お屋敷へ」

と、走りかゝつて

「イヤ〜閉門ならば館へはなほ帰られじ」

と、行きつ戻りつ思案最中。腰元おかる、道にては

ぐれ

「ヤア勘平殿、様子は残らず聞きました。こりや何

とせうどうせう」

と、取付き嘆くを、取つて突退け

「エ、めろ〜とほえ面、コリヤ勘平が武士はすた

つたわやい。もうこれまで」

と、刀の柄

「コレ待つて下され。こりやうろたへてか勘平殿」

「オ、うろたへた。これがうろたへずにをられやう

か。主人一生懸命の場にも在り合わず、あまつさ

へ囚人同然めしうどの網乗物お屋敷は閉門、その家来は色に

耽りお供にはづれしと人中へ、両脇差し出られうか。

こゝを放せ」

「マア／＼待つて下さんせ、マア／＼待つて下さん  
セイナア。もつともじや道理ぢやが、その狼狽うろたえ武士  
には誰がした。皆わしが心から死ぬる道ならお前よ  
り私が先へ死なねばならぬ。今お前が死んだらば誰  
が侍ぢやと誉めます。こゝをとつくりと聞き分け  
て、私が親里へひとまづ来て下さんせ。父様も母様  
も在所でこそあれ頼もしい人、もうかうなつた因果  
ぢやと思つて女房の言ふ事も聞いて下され勘平殿」  
と、わつとばかりに泣き沈む。

「さうぢや。もつともそちは新参なれば、委細の事  
は得知るまい。お家の執権大星由良助殿、今だ本国  
より帰られず、帰国を待つてお詫びせん。サア一時  
なりとも急がらん」

と身拵へするその所へ、鷺坂伴内、家来引連れ駆出  
で

「ヤア／＼勘平。うぬが主人の塩谷判官おらが旦那  
の師直様と何か知らぬが殿中において、あつちやの  
方でぼつちやくちや、こつちの方でべつちやくちや、  
ちやつちやくちや／＼咄しのうち、小さ刀をちよつ  
と抜いてちよつと切つた科によつて、屋敷は閉門網  
乗物にてエツサツサ／＼、エツサツサ／＼、エツサ  
ツサとぼつ帰した。追付首がころりと飛ぶは知れた  
こと。サア腕回せ連れ帰つてなぶり切り、覚悟ひろ  
げ」

と、ひしめけば

「ヤアよい所へ鷺坂伴内。おのれ一羽で食足らねど  
勘平が腕の細ねぶか、料理塩梅あんばい食うて見よ」

「ヤア物は言はずな家来ども」

「畏つた」

と、両方より

「取つた」

と、かゝるを

「まつかせ」

と、かいくゞり、両手に両腕捻ぢ上げ、はつし〜

と蹴返せば、代つて切込む切先を、刀の鞘にて丁ど

受け、廻つて来るを鑑こじりと柄つかにてのつけにそらし、

四人一緒に切りかゝるを、右と左へ一時に、でんが

く返しにばた〜と打据へられ、皆ちりぢりに

行く後へ、伴内いらつて切りかゝる、引ばづしてそ

つ首握り、大地へどうともんどり打たせ、しつかと

踏付け

「サアどうしようことうとどこつちのまゝ。突

かうか切らうかなぶり殺し」

と、振上ぐる刀に、すがつて

「ア、コレ〜そいつ殺すとお詫びの邪魔。もうよ

いわいな」

と留める間に、足の下をこそ〜こつこそ、尻に

尾のない鷺坂は頭はあるかと振つてみて

「あるとも〜大丈夫。」

命からがら逃げて行く

「チエ、残念々々、さりながらきやつをばらさば不

忠の不忠。ひとまず夫婦が身を隠し、時節を待つて

願うて見ん」

もはや明六ツ東がしらむ横雲にねぐらを離れ飛ぶ

鳥かはい〜のみょうと女みょうと夫連れ、道は急げど後へ引く、主

人の御身いかかと案じ行くこそ

よしつねせんぼんざくら

## 義経千本桜

### 〔解説〕

竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作。延享四年（一七四七）大坂竹本座初演。全五段の時代物。この作品は「仮名手本忠臣蔵」「菅原伝授手習鑑」と共に浄瑠璃の三大傑作とされています。義経伝説の堀川夜討ち、大物浦、吉野落ちの三事件を骨子とし、そこに壇ノ浦での平家滅亡に際して死んだとされた知盛（とももり）、維盛（これもり）、教経（のりつね）が、実は生きていて源氏に復讐しようとする筋がからまっています。

### 〔このまでのあらすじ〕

義経は平家追討の功により、後白河法皇から初音の鼓を賜りますが、実はこれには頼朝追討の院宣（いんぜん）が託されていました。頼朝は義経に使者を遣わし、知盛・維盛・教経の首が偽首であったこと、初音の鼓のことを詰問します。義経は申し開きをし、平家の出である義経の妻卿の君は自ら命を断って和睦をはかりますが、追っ手に押し寄せた土佐坊を弁慶が切ったことにより全ては水の泡となります。

義経はあとを慕ってきた愛妾静御前（しずかごぜん）を家臣佐藤忠信に託して、都を落ちていきます。静御前は、吉野に義経がいると聞いて、忠信と共に吉野への旅に出ます。

### 〔あらすじ〕

静御前は、義経に託された初音の鼓を携えて、家臣の佐藤忠信を共に吉野への旅路の道すがら、忠信は屋島の戦いで義経の盾となった兄継信の最期を語るのです。

# 道行初音旅

恋と忠義はいづれが重い、かけて思ひははかりなや

忠と信の武士に、君が情と預けられ、静に忍ぶ都をば跡に見捨てて旅立ちて、つくらぬ形も義経の、御行末は難波津の、波に揺られて漂ひて、今は吉野と人づての噂を道のしほりにて、大和路さして慕ひ行く

見渡せば、四方の梢もほころびて、梅が枝諷ふ歌  
姫の里の男が声々に

「我が妻が天井抜けて据える膳。昼の枕はつがもなや、ヲ、つがもなや」

おかし鳥の一節に、人もわらやの育ちにも、春は羽根つく手鞠ひいふうつくづくと聞けば、東風風音添

へて、去年の氷を徳若に御萬歳と、君も栄えまします。愛敬ありや頼もしや、さぞな大和の人ならば御隠れ家をいざ問はん。我も初音のこの鼓、君の栄を寿きて昔を今になすよしもがな

谷の鶯ナ、初音の鼓初音の鼓、調べあやなす音につれて、つれて招くさ。遅ればせなる忠信が旅姿、背に風呂敷をしかとせたら負ふて、野道畦道ゆらりゆらり、軽い取りなりいそいそと

「目立たぬやうに道隔て、女中の足と侮つて、さぞお待ちかね。ここ幸ひの人目なし」

と、姓名添へて賜りし、御着長を取り出し、君と敬ひ奉る。静は鼓を御顔と、よそへて上に沖の石

「人こそ知らね西国へ、御下向の御海上。波風荒く御船を、住吉浦に吹き上げられ、それより吉野にま

します由」

「やがてぞ参り候はん」

と、互ひに筐を取り納め

「雁と燕はどちらが可愛、やゝを育つる燕が可愛。

花を見捨つる雁金ならば、文の便りも又の縁。エ、

そふじやいなエ、そふじやいな」

諷ふ声々面白や

「実にこの鎧を賜りしも、兄継信が忠勤なり。誠

にそれよ越し方を、思ひぞ出る壇ノ浦の、海に兵船

平家の赤旗、陸に白旗源氏の強者。『アラものもの

しや』と夕日影に長刀を引きそばめ、『何某は平家

の侍悪七兵衛景清』と、名乗りかけ名乗りかけ、薙

ぎ立て薙ぎ立て薙ぎ立つれば」

「花に嵐のちりちりぱつと、木の葉武者」

「『云ひがひなしとや方々よ、三保谷ノ四郎これに

あり』と、渚に丁ど打ってかゝる。刀を払ふ長刀の、

えならぬ振舞いづれとも、勝り劣りも波の音。打ち

合ふ太刀の鏝元より、折れて引く汐」

「帰る雁」

「勝負の花を見捨つるかと、長刀小脇にかい込んで、

兜の鑿を引つ掴み」

「後へ引く足よろよろよろ」

「向かふへ行く足たちだちだち。むんずと鑿を引き

切つて、双方尻居にどつかと座す。『腕の強さ』と

云ひければ」

『『首の骨こそ強けれ』と』

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

「ホ、ホ、ホ、ホ、ホ」

「笑いひし後は入り乱れ、手繁き働き兄継信、君の御馬の矢面に駒を駆け据え立ちふさがる」

「フ、聞き及ぶその時に、平家の方には名高き強弓、能登守教経と名乗りもあへずよつ引いて、放つ」

「矢先は恨めしや、兄継信が胸板に、たまりもあへず真つ逆様。あへなき最期は武士の、忠臣義士の名を残す」

思ひ出るも涙にて、袖は乾かぬ筒井筒。いつか御身ものびやかに、春の柳生の糸長く、枝を連ぬる御契り、などかは朽ちしかるべきと、互ひに諫め諫められ、急ぐとすれどはかどらぬ、芦原峠かうの里、土田六田も遠からぬ、野路の春風吹き払ひ、雲と見紛ふ三芳野の、麓の里にぞ

つばさかかんのんれいげんき

## 壺坂観音靈驗記

### 〔解説〕

福池桜痴（一説には伊東椿増）が作ったと言われる浄瑠璃に、二世豊澤団平の妻千賀が加筆してできた明治新作浄瑠璃の一つです。団平が作曲し明治十二年十月、大阪大江橋で六世豊竹島太夫が最初に語り、その後、作曲家自身が曲を改めて、明治二十年稻荷彦六座で三世大隅太夫と上演しました。翌二十一年には歌舞伎化もされ、以来、これを上演すれば必ず大入りになるといわれるほどの人気曲となりました。

盲目の座頭の沢市と、彼に献身的につくす妻、お里の夫婦愛の物語。「三つ違いの兄さんと…」という、お里のくどきは有名です。ちなみに壺阪寺もこの浄瑠璃の評判に伴い、辺鄙な場所にもかかわらず、遠方からの参詣人が集まるようになりました。

### 〔あらすじ〕

沢市内の段

座頭の沢市は、洗濯物や賃仕事をして生活を助ける妻のお里と、壺阪寺のほとり、

土佐町に細々と暮らしていました。沢市は子どもの頃に疱瘡から盲目となり、そのひがみから、三年の間、毎夜七つ過ぎに家にいたことがないと、お里の行動を疑い続けていました。ところがお里は、沢市の目を治したい一念で、その昔、桓武天皇の眼病がここに立願して平癒したことから、眼病には靈験のあるという壺坂の觀世音に三年越しの祈願をしていたのでした。それを知った沢市は自分も参籠しようと、夫婦そろって寺に向かいます。

**山の段** 沢市は三日間断食をするため、お里を家に帰しますが、一人になると、治る見込みのない祈願をするよりも死んでしまった方が、お里に苦勞をかけずにすむと思ひ、谷底に身を投げてしまします。再び山へもどったお里は、沢市の姿がないので探すうち、谷底に死骸を見つけ、死後も盲目の沢市の手引きをしてやらねばと思ひ、夫のあとを追います。そこに觀世音があらわれ、妻の貞節と日ごろの信仰心により、二人の命を助け、沢市の目を開けるのでした。

## 沢市内の段

夢が浮世か浮世が夢か、夢てふ里に、住みながら、  
住めば住むなる世の中によしあし曳きの大和路や、  
壺坂の片辺り土佐町に、沢市といふ座頭あり生れつ  
いたる正直の、琴の稽古や三味線の、糸より細き身  
代の、薄き煙の営みに、妻のお里は健やかに、夫の  
手助け賃仕事つづれさせてふ洗濯や、糊かひものを  
打盤の、音もかすかの暮らしなり。

〴〵鳥の声、鐘の音さへ身に泌みて、思ひ出すほど、  
涙が先へ落ちて流るゝ妹背の川を

「オ、これは〴〵沢市様。けふはなんと思ふてやら、  
三味線出して、よい機嫌ぢやの、ホ、〴〵」

「オ、お里か。そなたアノ、おれが三味線弾くをよ  
い機嫌に見ゆるかや」

「アイナア」

「ハテナア、おりやそんな気ぢやないはいの。モウ  
モウ気が詰つて〴〵いつそ死んでもものけう」

「エ、」

「イヤサアノ死んでしまうほど、気がふさいでなら  
ぬわいなう。コレお里。わしやそなたに、チト尋ね  
たいことがある。マ、〴〵へおぢや〴〵。ハテまあ  
〴〵へおぢやいなう。ほかのことでもないが、いつ  
ぞは聞かう〴〵と思ふてゐたが、丁度幸ひ。光陰矢  
のごととやら、月日の経つはア、はやいものな。  
ソレわが身とおれが、コウ一緒になつてからモウ三  
年。稚ない時より許嫁。互に心も知つてゐるにマな  
ぜ、そのやうに隠しやるぞさつぱりと打明けて、云  
ふてたも」

とどこやら濁る詞のはし。お里はさらに合点いかず  
不審ながらに

「コレ沢市様、そりやお前なにを云はしやんす。嫁入りしてから三歳の間、モほんに／＼露ほども、隠し立てしたことはござんせぬが、それともになんぞまた、お気に入らぬことあらば、云ふて聞かして下さんせ。サそれが夫婦ぢやないかいな」

「ム、そう云やればこつちも云はう」

「オ、なんなりとも云はしやんせ」

「オ、云はいでか。コリやお里。マよう聞けよ。われと夫婦になつて丸三年。每晚七つから先、つひに一度もゐたことがない。ソリヤもうおれはこのような盲目。ことにえらい疱瘡で、モ見る影もない顔形。どうでわれの気に入らぬは無理ならねどほかに思ふ男があらば、さつぱりと打明けて、云ふてくれたらこのようになんの腹を立てうぞい。尤もわれとおれとは従兄妹同士。もつぱら人の噂にも、アノお里

は美しい／＼と、聞く度ごとにおれはもう、よう諦めてゐるほどに、愠気は決してせぬぞや。コレどうぞ明かして云ふてたも」

と、立派に云へど目に漏るゝ、涙吞込む盲目の、心のうちぞ切なけれ。聞くにお里は身も世もあられず、縋りついて

「エ、ソリヤ胸欲な沢市様。いかに賤しい私ぢやとて、現在お前を振捨てゝ、ほかに男を持つやうな、そんな女子と思ふてか。ソリヤ聞こえませぬ聞こえませぬ／＼はいな。モ父様や、母様に別れてから伯父様のお世話になり、お前と一緒に育てられ、三つ違ひの兄さんと、云ふて暮してゐるうちに、情けなやこなさんは、生れもつかぬ疱瘡で、眼かいの見えぬその上に、貧苦にせまれどなんのその、一旦殿御の沢市様。たとへ火の中水の底、未来までも夫婦ぢ

やと、思ふばかりかコレ申しお前のお目をなおさんとこの壺坂の観音様へ、明けの七つの鐘を聞き、そつと抜け出でたゞ一人、山路いとはず三年越し。せつなる願ひに御利生のないとはいかなる報ひぞや。観音様も聞こえぬと、今も今とて恨んでゐた、わしの心も知らずして、ほかに男があるやうに、今のお前の一言が、私は腹が立つはいの」

と口説き立てたる貞節の涙の、色ぞ誠なる。初めて聞きし妻の誠。今更なんと沢市が、詫びの詞も涙声。「ア、コレ女房どの、なんにも云はぬ堪忍したも。謝つた〜。謝つたはいなう。モウさうとは知らず、不具の癖に愚痴ばかり。コレ堪へてたもれ」

と、ばかりにて、手を合はしたる詫び涙。袖や袂を浸すらん

「ア、コレ連れ添ふ女房になんの詫び。お前の疑ひ

晴れたれば、わたしや死んでも本望ぢや、わたしや死んでも本望ぢやわいな」

「イヤモウさう云ふてたもるほど、わが身の手前面目ないはいなう。ガそれほどまで信心してたもつても、おれがこの眼は治りはせぬはいの」

「エ、ソリヤマアなにを云はしやんすぞいな。この年月の憂き艱難。雨の夜、雪の夜霜の夜も、厭はぬ私が<sup>はだし</sup>跣参りも、みんなお前のためぢやぞえ」

「サアそれほどに祈誓をかけ、願ふてたもつた志。ありがたいとも、嬉しいとも、その貞節なそなたをば、この年月の廻り根性。ハテモウ観音様ぢやと云ふたとて、罰こそあたれなんのマア、この目が明いてたまるものか」

「エ、なんのいのふ。私の体はコレイナアコレ、お前の体も同じこと。そんな愚痴を云はうより、ちや

## 壺坂寺の段

辿り行く

つと心を取直し、観音様へともどもに、お頼み申して下さんせ、お頼み申して下さんせ」

と、夫を思う貞心の心遣ひぞ哀れなり。沢市涙にくれながら

「才、過分なぞや女房ども。さうそなたが一心の、据つた上は御仏の、枯れたる木にも花が咲くとやら、見えぬこの目は枯れたる木。ア、どうぞ花がさかしたいな。と云ふたところが、罪の深いこの身の上。せめて未来を」

「エ、」

「イヤサアノ女房ども。手を引いてたもいぎ〜」

と、云ふに嬉しく女房が、身拵へさへそこ〜に、

芳はり渡す細杖の、細き心も細からぬ、誓ひは深き壺坂の御寺を、さして

伝え聞く壺坂の観世音は人皇<sup>じんのおう</sup>五十代、桓武天皇奈良

の都にまします時、御眼病甚しくこの壺坂の尊像へ、

時の方丈道喜上人<sup>しつびやくなぬか</sup>一百七日の御祈禱にて、たちまち

平癒をあらせられ、今に至つて西国の、六番の札所

とはみな人々の知るところ、げにありがたき靈地な

り。折しも坂の下よりも詠歌を、道の葉にて、沢市

夫婦やう〜と御寺間近く詣で来て

「サア〜沢市様。ソレ観音様へ来たはいな」

「ハア、モウここが観音様か。ヤレ〜ありがたや

〜。ハア、南無阿弥陀仏〜〜〜」

「コレ〜こちの人、今宵こそゆつくりと、御詠歌を夜もすがら、上げませうではあるまいか」

と夫婦して、唱ふる詠歌の声澄みて、いとしん〜

と殊勝なれ

へ岩を建て、水をたたへて壺坂の

「コレお里。叶はぬこととは思へども、そなたの詞に従ふて、来ごとは来てもなか／＼に、この目は治りさうなことはないはいなう」

「エ、この人はいな。またしても／＼そんな事。モとかく信心といふものは、気を長う歩みを運んで、心を鎮め一心に、お縫り申せば何事も叶へてやるとの御慈悲ぢやはいなう。モウモそんなこと云ふ手間で、はやうお唱へ申しましょ」

と力を付くれれば

「いかさまなう。ほんに云やればそのとほり、そんならわしは今宵から、三日の間、ここに断食するほどに、そなたは早ううちへ去いんで、なにかの用事仕舞うておぢや。治るとも、治らぬとも、この三日の

間が運定め」

「オ、よう云ふて下さんした。そんなら私もうちへ帰り、なにかの用事片付けて来ませう。ガコレ沢市様。このお山は嶮しい山路、ことに坂を登りて右へ行けば、幾何丈とも知れぬ谷間ぢやほどに、コレ構へてどつこへも」

「オ、どこかへ行かうぞ。今夜から観音様と、首引きぢや。アハ、ハ、ハ」

「ホ、ハ、ハ、ハ」

と笑ひながらに女房が跡に心は置く露の、散りてはかなき別れとも知らでとつかは急ぎ行く。跡に沢市ただ一人、こらへし胸の遺瀬やるせなくかつぱと伏して泣きゐたる。

「コレ嬉しいぞや女房ども。この年月の介抱その上に、貧苦にせまるも厭ひなく、ただの一度も愛想つ

かさずあまつさへ、目かいの見えぬこの身をば、大事にかけてたも志。それとも知らずにいろいろの疑ひだて。コレ堪忍してたもく。今別れてはいつの世に、また逢ふことのあるべきか。不憫の者やいぢらしや」

と大地にどうと身を打伏し前後、不覚に歎きしが、やうく顔を上げ

「ア、歎くまいく。三歳がみとせ間女房が、信心凝らして願ふても、なんの利益もないものを、いつまで生きても詮ないこの身。世の諺にも云ふとほり、退のけば長者が二人の譬たとへ、コレわしが死ぬのがそなたへ返礼。生き存ながらへていづれへなりと、よき縁付きをしてたもや。ヤ、ム、ム、最前聞けば坂を登りて右へ行けば、幾何丈とも知れぬ谷間とのこと。これくつきょう究竟の最後所。かかる靈地の土とならば、未来は

助かることもあらん。ム、幸ひに夜は更けたり。人なきうちに、オ、さうぢやく」

と、立上り、乱るゝ心取直し、上る段さへ四つ五つ、はや更けわたる鐘の声

「イザ最後時急がん」

と杖を力に盲目の探りくくてやうくとこなたの、岩にかけ上れば、いと物凄き谷水の、流れの音もどうと、響くは弥陀の迎ひぞと、杖を傍へにつき立て、

「南無阿弥陀仏」

と、諸共に、がばと飛込む身の果ては哀れなりける次第なり。かかることも露知らず、息せき道より女房が取つて返すも気はそぞろ、常に馴れにし山道も、滑り落つやらまろ転ぶやら、やうく登る坂の上「ヤア、コリヤコレこちの人が見えぬはいな。沢市

様／＼、沢市様いなう／＼」

と尋ね廻れど声だにも、人影さへも見えざれば、あなたへうろ／＼こなたへ走り

「沢市様いなう／＼」

とここかしこ木の間を洩るゝ月影に透せば何か物ありと、立寄り見れば覚えの杖。『ハツ』と驚き遙かなる、谷を見やれば照る月の、光に分つ夫の死骸  
「ハアこりやマアどうせう悲しや」

と狂気のごとく身を悶え、飛び降りんにも翅つばさなく呼べど叫べどその甲斐も、答ふるものは山彦の訝よりほかなかりける

「エ、こちの人聞こえませぬ／＼／＼。聞こえませぬはいな。この年月の艱難も、厭はぬ私が辛抱はな、たゞ一筋に観音様へ願込めて、どうぞはやう眼の明きますやう、お助けなされて下されと、祈ら

ぬ間とでもないものを、けふに限つてこのしだら。

跡に残つてわたしやマアどうなるぞいな、どうせう／＼／＼、どうせうぞいな。かういふことならなんのマア、お前を無理に連れて来ませう。コレ堪忍して下さんせ／＼エ、。ほんに思へばこの身ほどはかない者があるかいな。二世と契りしわが夫に永い別れとなることは、神ならぬ身の浅ましや。かかる憂き目は前の世の、報ひか罪かエ、情けなや。この世も見えぬ盲目の闇より、闇の死出の旅。誰が手引きをしてくれう迷はしやるのを見るやうで、いとしいはいの」

と、かき口説き、口説きたて／＼歎く涙は、壺坂の谷間の水や増るらん。やう／＼涙の顔を上げ

「ア、悔やむまい歎くまい。みな何事も前の世の、定りごとと諦めて、夫とともに死出の旅。急ぐは形

見のこの杖を、渡すはこの世を去りてゆく、行先導き給へや南無阿弥陀仏」

弥陀仏の、声もろともに谷間へ、落ちてはかなき身の最後、貞女のほどこそ哀れなり。頃は如月、中空なみぞらや、はや明け近き雲間よりさつと輝く光明につれて、聞ゆる音楽の音も妙なるその中に、いとも気高き上藹の姿を仮に観世音。微妙の御声うるはしく

「いかに沢市承れ。汝前世の業により盲目となつたり。しかも兩人ながら、今日に迫る命なれども、妻の貞心または、日頃念ずる功德にて、寿命を延ばし与ふべし。この上はいよ／＼信心がっしん渴仰して、三十三所を順礼なし、仏恩報謝なし奉れ。コリヤお里／＼沢市／＼」

と宣ふ御声もろともに、かき消すごとく失せ給へばじんちようはや晨朝の鐘の声四方に響きて明け行く空、ほの

ぼの暗き谷間には、夢とも分かぬ二人とも、むつくと起きて

「ヤこなたは沢市どの。ア、コレこちの人。お前の眼が明いてあるがな」

「エ、アノ、ほんにコリヤ眼が明いてある。ア、眼が明いた。眼が明いた／＼／＼、眼が明いた。チエ、観音様のお陰。ありがとうござります。ありがとうござります／＼。ム、そしてアノ、お前はマアどなたちやへ」

「どなたとはなんぞいの。コレ私はお前の女房ぢやはいな」

「エ、アノお前がわしの女房かへ。コレハシタリ初めてお目にかかります、ハ、ハ、ハ。ア、嬉しや／＼。それについても不思議なこと。正しくわしは谷へ落ち、死んだと思ふてなにも知らぬその中に、観音様

がお出でなされ、前世からのこと、こまごまと御知らせ」

「サイナア、私もお前の跡を追ひ、谷へ落ちたに違ひはない。ガ身内に一つも疵つかず、その上お前のお眼は明く、コリヤマア夢ではないかいな」

「ム、そんなら、今沢市〜とおつしやつたが、コリヤ観音様がじき〜に、お呼び生け下されましたに違ひはない。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ありがたや忝や。これよりすぐにお礼参りは浮木の亀、初めて拝む日の光は、年立返る、心地ぞや」

これぞ誠に観音の、御利生ありけるや見えぬ眼も見え明らかに、ありがたかりける新珠の、年立返るごとくにて、水も漏らさぬ夫婦の命も助かりけるは、誠に目出たう候ひける。けふは嬉しや杖を納めて折しも朝の、日の目を拝んで、お礼申すや神や仏。万よろず

見せ給ふはこれひとへに観世音の、これひとえに観音の誓ひの重きは岩を建て水を、たたへて壺坂の庭の砂こぼしも浄土なるらん御示しありがたかりける御法なり

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。  
予めご了承ください。